

サービスマーケティングの活動を行って

社会福祉学部社会福祉学科 2年 小中 凌

活動先：NPO 法人 プレママクラブ

ゼミ：松下 典子

私がサービスマーケティングの活動をさせていただいたのは、「プレママクラブ」というNPO 団体である。私はその中でも学童保育の活動を行っている「げんきッズ南部」という施設で主に活動をさせていただいた。なぜ私がこの施設を活動先に選んだかという点、私は今まで子どもに関する福祉について興味がなく、進んで勉強をしたこともなく知識がほとんどなかった。しかし大学での学びを重ねていくごとに地域での福祉に関する点に興味が出てきて地域福祉を学ぶならこれまで興味がないがために学んでこなかった子どもの分野も学ばないといけないなと思ったのが第一の理由である。そして、また地域福祉に関する点について学ぶ上で「学童保育が地域にどのような影響を及ぼしているか、なぜ必要であるか？」と気になったということもこの施設を選択した理由の一つである。

施設での活動は8月の中旬の6日間であった。この期間は施設を利用している子供たちは夏休みということで1日の大半を施設で生活をしていた。したがって、施設で活動する上で私たちは、夏休みという子どもたちにとっては一大イベントであるものに私たちが介入することで日常が非日常になり、そこに喜びであったり感動を感じてもらい、夏休みの思い出の一つとして子どもたちの心に残れるような活動にしようと目標をたてた。またその子どもたちとの関わり合いをしていくことで地域において学童保育がどのような役割を担っているのかということを知りたいと活動目標をたてた。

活動をしている間の1日の流れは9:00~11:00「自由」、11:00~12:00「勉強」、12:00~13:00「お昼ごはん」、13:00~15:00「自由」、15:00~「おやつ」というような流れであった。この自由時間というのは子供たちがそれぞれやりたいことをやる時間であり1日の大半がこれである。遊ぶ子供がほとんどであるが、中には自主的に勉強をし始める子供も何人かいる。次に勉強ですが、この時期は夏休みの宿題をやっている子供が多かった。そしてお昼ご飯を食べてまた自由時間と、そのあとにその日にあった出来事などを話し合うミーティングをおこなって私たちは解散していた。子どもたちはみな元気で一緒に遊んでいたが私たちは体力がついていかないことが多々あった。初めのころは子供たちとうまく関係を築くことが出来るのか不安だったが、子どもたちから遊んで遊んでと誘ってくれて初日から仲良く一緒に遊んだりすることが出来た。しかしそのような受け身の姿勢だったからか、一人で遊んでいるような子どもに意識がいかなくなった。しかし1日目のミーティングでその点について話し合うことが出来たため次の日からはその反省を活かし活動することが出来た。このようにその日あった出来事などをお互いに共有し合い、反省し、活かすことで日に日に活動内容が濃いものとなっていたように感じた。

私がこのサービスマーケティングを通して気が付いたことは、学童保育での先生というのは

子供の遊び相手をすればよいということではなく、その遊びの中にも学びを混ぜていく、ある意味学校の延長線上のようなイメージをもった。また私が学童保育に通っていなかったので参考にならないかもしれないが、最近の子どもは習い事を多くやっているなど感じた。私が小学生のころは習い事をやっていた子どもがまず珍しくやっても1~2つ程度であった。しかしプレママに通う子供たちに聞いたところ習い事をやっている子供が大半であり、多くて3~4つの習い事をやっている子供も少なくなかった。また私が子供のころはスポーツなどが習い事の大半であったが今は英語やチャレンジなど勉強に関する習い事をやっている子供が多かった。

今回の活動で私がこれからの生活に生かしていきたいと思うのはまず相手の目線に立って話す、考えるということである。今回は子どもたちだけの相手しかできなかったのだがこれは子供だけでなく障害者であったり高齢者といったような様々な状況にある人々の支援をする際にも重要なことであると考えます。福祉において相手の気持ちを察し、それに根差した支援をするということはとても重要なことであると考えている。そしてそのためには私たちが子どもたちや高齢者、障害者、またその家族といったクライアントとの信頼関係を築くということが絶対的に欠かすことのできない条件であると思う。ここで信頼関係を築くために必要不可欠であるのが”相手と目線を合わせて話すということ、また考えるということである”と私は思うのである。相手の立場を考えてこちらが接すればその想いが伝わり信頼関係が出来ていくと私は考える。

私は今回の活動を通してこの学童保育という施設は地域において必要な存在なんだと改めて知ることが出来た。女性の社会進出が進み両親共働きが増加、核家族の増加など時代が変化してきた今の日本において、学童保育は子供たちの生活の場の一つであると感じた。働く親の状況と子どもを取り巻く環境を鑑みる時、学童クラブの社会的役割は決して小さくない。共働き家庭・ひとり親家庭の小学生児童の放課後と学校休業中を、家庭に代わって安全に過ごせるようにケアすることが基本的役割であり、そのことが子どもと親の精神的安定にもつながっている。あそびを主体とした異年齢のタテ関係の中では技術や文化の伝承や人とつながる力の育成などの教育的側面も期待されるが、なにより重視したいのは、本来地域社会にあったはずの子どもらしさを取り戻す「生活」の場として、子どもにとって学童クラブの存在が大きいことである。子どもを「育てる」のではなく「育つ」場としての地域の再生、その一端を学童クラブは担っているのではと強く感じる事が出来た。小児化対策や女性の就労と社会進出を応援するうえでも、次代の日本を担う子どもたちを育てる環境を整備することは非常に重要なことであると考えます。この活動から国民全体・市民全体で具体的な形で子育てを援助していかなければならないと思った。